

## 「フランス人研究者ヴァラット夫妻を迎えての国際シンポジウムに出席して」

NEC通信システム 荒木 聖史

4月21日に早稲田大学で開催されたフランス人研究者ヴァラット夫妻を迎えてのシンポジウムに出席させていただく機会を得ました。その感想を書かせていただきたいと思います。

とはいうものの研究手法についての感想など学術的な視点での感想はおそらく私以外の方が書かれると思いますので、私はKMに関係性はあるもののちょっと斜めからの視点で書かせていただこうと思います。

会場に到着して、まず驚いたのは小学生くらいの子供が見知った顔の中にポツンといたことでした。それも、本当に愛くるしい、それこそ昔の少女マンガ(それも一条ゆかりとか三原順とか)に出てくるような美しい顔立ちをした小学生がいたのです。あまりに整った顔立ちですし、まだ小学校低学年なので男の子なのか女の子なのか判別がつかなくらいです。

おそらく本人は、「女の子？」と聞かれることに不満を持っていることと思いますが、将来、たくさんの女の子を泣かせることになるだろうことは容易に想像できます。。。

と、別にご夫妻のお子さんの容姿の話がしたい訳ではなく、その場に子供がいたこと、それを当然として私たちKM学会のメンバも受け入れ、ご夫妻も自然にふるまわれていたことに私は感動しました。

頭の古い人ならば、「研究者としての仕事場に子供を連れて来るなんて、何を考えているのか！」と怒り出したかもしれません。

しかし、ご夫妻で日本に研究の為に出張するという事は、「その間子供の面倒を誰が見るのか。」という問題がつきまとうこととなります。本国であれば子供を預けるところもあるでしょう。しかし、海外にやってくる間ずっと面倒をみてくれるところなんてあるでしょうか？また、そんなに長期間、離れていることに、子供も両親も堪え切れるでしょうか？

私は、ご夫妻が子供を同伴し、私たちがそれを当然のこととして受け入れたことを誇りに思います。このようにそれぞれの人が抱える事情をお互いが努力して解決したことが素晴らしいと思うのです。そしてお二人プレゼンテーションをして私たちが質疑応答をしている間、お子さんは大人しく席に座って眺めていました。決してダダをこねることもなく。

#ぼそつ。。。うちのガキンチョにはあんなに長い間大人しく座っているなん#で無理だろうなあ。。。

(「親が悪い！」って？ほっといてください。。。)

そして、お二人のプレゼンが始まってもう一つ驚いたことがありました。プレゼン資料にお二人の名前が記載されていたのですが、「姓」が違っていただけです。

「えっ、ご夫妻って聞いていたよなあ。。。」

と、思った瞬間に最近読んだフランスに関する記述に、フランスでは出生率も上がっているが、事実婚の割合も増えている、というのがあったことを思い出したのです。

日本でも、子供のいない夫婦が別姓を掲げていることはあります。私の友人にもそういう人たちがいました。しかし、子供が生まれると社会制度的に被る不利益が多いため、仕事上の通り名として旧姓や別名を使う人はいるものの、籍は一つにすることが多いようです。

日本の場合、戸籍制度に関係する問題でもあり、そう簡単に変化することはないと思います。しかし、フランスでは夫婦別姓という選択をしても不利益がない、あるいは少ないからこそ、彼らは夫婦別姓を貫くことができることは間違いないでしょう。少し前まではフランスでも家族のあり方を変えることに抵抗があったに違いありません。しかしながら、変えることによって出生率は上がって来ました。これは、少子高齢化に悩む日本にとっても大いに参考になることです。

子供連れのシンポジウム、夫婦別姓。これらに共通することは何かといえば、ダイバーシティ、多様性です。もちろん、ダイバーシティ＝女性と短絡するつもりはありません。ただ、多様性について考える時、女性の活用、子供を連れて働くことが許される範囲が拡大することは、別の事情を抱えた人たちを活かすアプローチにも応用できるように思います。

お二人の研究発表を聞きながら、フランスという国は子供を持つ男女が働きやすい環境を整えることで、子供が父母の仕事場に行っても不思議ではないマインドを共有することで、多様性を受け入れる素地が出来ているのだと感じました。

移民の人たちと元からのフランス人との対立もあるようですが、それも女性の社会進出を促したような社会制度の改革によって出生率が向上したように、きっと解決できると感じられました。おそらく今は過渡期であり、移民の人たちも普通のフランス人となり、そのバックグラウンドの違いによる多様性を発揮していくのだと思います。

振り返って私たち日本人はいつまでこのモノカルチャーの社会を続けていくのでしょうか。知の創造において多様性が有効であることは、私たちKM学会の人間にとっては当たり前のことであると

思っていますが、日本社会では、多様性を排除したり攻撃する人たちも少なくありません。私たちが行動することによって日本の中に多様性のタネを蒔いていかなければならないとヴァラット夫妻をお迎えして強く感じたのでした。

と、発表についてはまったくふれないのかい？という空耳が聞こえたので、ひとつだけ感想を言わせていただくと、フィールド調査での視点と各事例での比較を表のような形でまとめていただけると嬉しかったです。

さらに私たちの研究と併せてその表からいくつかの類型ができあがったとすれば、どんなタイプの会社にはどのようなナレッジマネジメントスタイルが向いている、なんて議論をグローバルな事例から導き出せたとすれば、大いに社会に貢献できますね。